

交流協会 学生交流事業

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進のため様々な招聘・派遣事業を実施しています。平成24年2月5日から2月12日まで台湾の日本の人文社会科学研究（歴史・社会科学・経済・政治・外交・法学・商学・教育等）に関心のある大学生15名を現代日本社会や文化に対する理解を一層深めるために東京・長野に招聘しました。

訪日前には、日本の政治、外交、社会情勢等について2日間の集中講義を行うとともに、日本では早稲田大学における「戦後日本の台湾認識」と題する講義及び日台の学生による意見交換、発表、信州大学訪問、また、文化体験では、ホームステイ、茶道、着物等の日本の伝統文化を体験し短期間の日程ながらも多くのプログラムを通じ学術や文化・習慣に触れることが出来たようです。

今回招聘した15名のうち、男性2名女性4名の訪日報告書を2回にわけてご紹介致します。

短期滞在一日本大冒険

国立中山大学中国文学学科
林盈芳

1. 縁起

幼児期に私は日本の教育を受けた祖母と一緒に生活をしていました。祖母はとても「親日」であり、日蓮正宗を信仰しており、みそ汁を愛し、NHKの大相撲を見るのが大好きです。夜には桃太郎や浦島太郎の物語を聞きながら私は眠りにつきました。彼女はいつも料理をしている時には古い日本の歌を口ずさんでいました。恐らくずっと昔から私は日本と繋がっていたのかもしれない。

その後父母とともに都市へと引っ越し、高校時代には東洋で流行している文化に魅了されていきました。ジャニーズに夢中になり、ジャニーズ事務所所属のタレントの管理制度と商品の販促に関する報告で、校内の社会科展に参加しました。他に、私は日本の小説と一緒に多くの時間を過ごしました。例えば太宰治、芥川龍之介、三島由紀夫、村上春樹等の作家とその作品は私の文学に対する

情熱を動かしました。また、私は人生で初めての原稿料で『源氏物語全集』を購入しました（しかし上述した書籍は全て中国語翻訳版です）。

時間がある時は私はいつも考えてしまいます。私は本当の「親日」なのだろうか、と。

台湾人は恐らく私同様、「日本」を見かけない場所はないでしょう。家電製品、車、服飾、化粧品、テレビ番組、アニメ、ドラマ、日本料理等々、どこでも目にすることが出来ます。中国人の消費や好みが影響しているのかもしれませんが。しかし私自身は日本の理解に対して完璧ではありません。より多くの側面を発見したいと思っています。とても上手い具合に私はウィンターキャンプのメンバーに選ばれました。運の良さを喜ぶ一方で、これまでの不勉強に頭を抱えました。日本語の勉強をしっかりとしていなかったのです。出発前、優秀で言語もとても流暢な団員たちの中で私はとてもプレッシャーを感じていました。「私は本当に大丈夫なんだろうか?」、とずっと怖かったです。不安な気持ちを抱き、北へ飛びました。八日間の日程が始まりました。

2. 日本大冒険

どの観光客も同じですが、異国へ到着するととても好奇心が強くなり、新鮮な感覚に襲われます。羽田空港で新宿へ行くバスに乗り、窓からは東京タワーを見ることができ、とても興奮しました！日本語では自分の意見を流暢に伝えることはできませんが、目や頭などの他の感覚器官がより鋭くなり、日本の衣食住に関して新たな認識を得ました。以下幾つかに分けて説明したいと思います。

日本の飲食について——愛情が注がれた料理

毎日これ以上無い満足感を得たのは「食」でした。

その中で、新宿の一蘭ラーメンは二十四時間営業しています。入店後券売機で食券を買いました。席はまるで「試験のカンニング防止」のように、一人一人の席が板で仕切られていました。スタッフは食券を見て料理を運んでくれます。注文した品は前方の小さな窓口から運ばれます。スタッフは深々とお辞儀すると、小さな簾を降ろして、後にはラーメンをすする音しか聞こえません。一人での食事の場合、知らない人と視線を交わすのが嫌いな人にはとてもいい選択だと思います。東京の初めての夜に私は笑い話を作っていました。寝る前にあまり満腹にしくなかつたので、最初は温泉玉子一つしか注文しませんでした。更にその玉子を割ってしまったのです。修倫に「失業して落ちぶれて、玉子一個しか変えない人みたい」と笑われてしまいました。私は仕方なくラーメンを追加しました。しかし、カスタマイズできるオーダー表にはお客が自分で麺の固さやスープの濃度、ネギやニンニクの量を定めることが出来ます。私は迷わず全て「基本」に丸を付けました。まさか辛くて涙がでるほどだとは思いませんでした。最終日の夜に私は佩伶と一緒に一蘭ラーメンを再訪し、彼女の言う通りにするとようやく夢にまで見たラーメンを食べることができま

した。スープの最後の一滴まで本当に美味しかったです！

東京の疎遠な食事の雰囲気と比べて、芋井を訪れ、おじいさんやおばあさんと一緒に昼食を共にし、ホームステイ先での美味しい「はらこ飯」「おでん」「ごぼうと牛肉の煮物」等数えきれない料理の数々を食べ、一緒に食事の準備をしたら、まるで本当の家族のようでした。夕食の時、Aのお父さんは「台湾では家族全員が揃うのを待ってから一緒に食事しないのか？」と尋ねたので、私と佩伶はどちらも、家族の仕事や勉強の関係で朝ご飯は各自で済ませ、大学に行っても三食は適当に済ませます、と答えました。Aのお父さんやお母さんと一緒にこたつを囲みながらご飯を食べ、おしゃべりしていると、普段あまり家族と一緒に食事をしない私にとって、幸せと温かさが満ちているのを感じました。

(そうでした、善光寺で奕寧と静宜と一緒に食べたみそ味のアイスクリーム、あれは絶品です！)

日本人の衣服に関して——形式の重視

東京の町並みでは多くの人が黒・白・灰色など質素な色の服を着ていました。特に通勤時間には歩くのが早い都市に住む人々は身だしなみを整え、コート、靴は防寒してある基本的なファッションです。多くの男性の髪型はまるで雑誌のモデルのような髪型で、女性も同様でした。

日本人は周り「違う」ことが好きではない、と聞いたことがあります。それは服や傘などからよくわかります。みんな一定の範囲内であり、私が身につけていた鮮やか色は街ではとても意外に感じさせるのでしょうか！東洋の服に対する「色とりどりで美しい」という認識は完全に変わりました。(他にも自由時間に山手線に乗ると、電車内の静かさには驚かされます。これは法律などではなく「暗黙の了解」であり、多くの人がこれを守っています。集団の中である種の「形式」と「礼儀」



が保持されていることはとても不思議でした！)

早稲田大学に到着し、日本の大学生はスーツに身を包んでいました。ここでも適切とは何か証明されました。私の大学で教授が学生にスーツ着用で授業への出席を要求すると、小さい反発では済みません。しかし日本で、私は教授の意図を理解しました。服装ではその素養を伝えられませんが、専門性を表し、場面の重視を伝えることはできるのです。まさに、日本は制服文化ですね。

松代とホームステイでは二度和服を着る楽しさを体験できました！日本人の伝統衣装や飲食文化はまるで話し方と同じで、一枚一枚、一品一品であり、どんな細かなことでもとても凝っています。例えば、和服の中に白い「白無垢」と呼ばれる服を着ます。腰には数本の縄があり、帯はきつく結べれます。草履を履く前には先に「足袋」を履きます。私は松代で足袋は貴族が履いた最初の靴下だったのだと耳にしました。これらの服を着せてくれたお母さんたちは力と手際の良さを兼ね備え、一層一層「締め付けられ」「包まれた」後、女性たちは頭を上げ、胸をはり、小さな歩幅で歩くしかなく、行動を大きく制限されました。そしてそれらは極めて大きな「姿の美しさ」の効果を

備えています。ホームステイではAのお母さんが自分の和服を持ち出して私たちを歓迎してくれました。紫色やピンク色はもちろん、花の模様もとても綺麗で、扇子等の小物を合わせればより美しくなります。

日本の建築について——永遠の風流人がここに

深川江戸資料館は昔の市井そのままであり、まるで別の時空に迷い込んだかのような感じでした。嬉しかったことは展示品に触れられることです。その中で、江戸時代の人々が門の上に貼った福を祈るためのお札（火事や天然痘除け）は台湾の新年に貼る春聯と少し似ていたり、似ていなかったり。江戸方式のユーモアがその中に感じられました。江戸時代の人々はもったいないの精神を持っていました。布、灰、排泄物、要らなくなったものは全て売るのでした。更に資料館では当時の人は住まいを固定化しないことを知りました。それは木造家屋だといつも火災が発生する危険性があるので、庶民は畳を持ってあちこち部屋を借りていたのです。

日本は文化保護をとっても重視している国です。国会図書館の規模は地下八階まであり、昭和に出版された漫画等、一つ残らず保存しています。デジタル図書館までもあり、その細心払った管理(特定の区域には靴や携帯品にカバーをかけるなど)と優しいサービスに私は日本の知識を保護する慎重さとプロ精神に感心せずにはいられませんでした。ここの書籍や資料は今後人類の文明において重要な証拠と成りうるでしょう。ロビーに掛けられた絵画もとても印象深かったです。それは天照大神が岩戸に隠れた物語をモチーフにして、多くの神が舞を舞って彼女を呼び出そうとしています。太陽は知識の象徴であり、知識があれば光と勇気もたらされると暗に例えているのです。

途中で天皇の居住地である「皇居」を通りました。そこは一片の森で、周りは掘りと城壁で囲ま

れていました。数百年前、篤姫と多くの風流人がここで歴史を作りました。ただ通り過ぎただけですが、興奮は言葉にできません。その他、善光寺、真田邸、真田宝物館、文武学校、象山地下壕等を訪問し、それぞれ収穫を得ました。まるで違った人物と出会ったかのようで、彼らの生活に触れ、彼らの気持ちを体感し、彼らの軌跡を追うことができました。

日本の性別について——次第に中性化する日本社会

今回のウィンターキャンプに応募するにあたり、私の研究計画書は「性別現象の研究」でした。そして、研修中に私はずっとそれに関することを観察していました。

日本では男女の間にある種の隔たりが存在します。レストランも「男性の店」「女性の店」と分かれていたり、人間関係でも「グループ」に分かれます。現地のニュースでは女性の政治家が画面に映ることは少なく、そこから推測するに、日本では女性の政治家が男性よりも少ないのではないのでしょうか。そして性別は政党資源の割合にも大きく関係しているようです。日本の女性は伝統的な「大和撫子」から次第に独立した路線を歩いています。政治参加には男性よりも大きな精神力が必要になり、台湾のような「女性の権利」が与えられるまでにはまだ長い道のりを頑張らないといけないようです。

その他、特別なテレビ番組を見ました。テーマは「日本の女装現象」についてです。女装は平安時代から存在し、多くの歴史上の人物も女装を好んだそうです。早期は男性が女装し、それを人に見せることで「人」と「神」を区別しました。それはとても「神聖」な意味が含まれているのです。しかし、現在日本の性別の境界線は次第に曖昧になってきています。伝統的な性別に対する印象は崩れかけ、男女ともに中性へと発展しています。

男性の女装は既に受け入れられているだけでなく、とても高い人気を得ています。逆に「女性の男装」も現象の一つです。「草食系男子」「肉食系女子」は日本の性別構成を変化させています。そして日本での流行は大抵遠くないうちに台湾へとやってきます。もしかするとそのうち台湾でも「女装男子」や「男装女子」などが一般的になる日が来るかもしれません。

東日本大震災に関して——頑張れ！日本！

東日本大震災後、台湾による支援が日本に深く刻まれたため、どんな活動のときでも、よく台湾に感謝する内容が見受けられるようになったそうです。

事実、東日本大震災が発生すると、台湾人はメディアを通して天災の恐ろしさ、生命の脆弱さを再認識しました。そして日本国民の意志の硬さ、冷静な対応には心打たれました。私にとって日台の相互扶助はとても意味のあることなのです。台湾は1999年に921大震災を経験しました。当時小学校四年生だった私は家が全壊した被災者であり、生死を分けた一瞬の恐ろしさと痛みは一生忘れることができません。あれから十二年経ちましたが、被災地に入り私たちを助けてくれた国際救援団体は日本人でした。そのことは今でも鮮明に覚えています。

台湾では「人が飢えていると己もその飢えを感じ、人が溺れていると己もその溺れを感じろ」という言葉があります。日本でこんなにも大きなことが発生したら、義を尊ぶ台湾人は見過ごすことは出来ません。その時、所謂意識形態、民族主義、政治的立場は重要ではありません。私たちは同じ環太平洋の地震帯に属する島国なのです。いつでも天災に見舞われる可能性を秘めています。そのため、お互いに援助の手を伸ばし、信頼と支援を確立させることで、国際間での重要な繋がりとなるのです。台湾人はずっと震災後の日本の復興を

心配しています。これからも頑張って、再び立ち上がって下さい！

日本の内緒話について

Sさんは日本の「悪い点」も見て下さい、と言いました。実際、たった八日間では「綻び」を見つけることは難しいですが、しかし私は一つ討論すべき問題を発見しました。

旅行期間中、とても新鮮で興味深いものばかりでした。高科学技術製品、優しいサービス態度。それらは「比較する心」を起こさせないほどで、自分たちの場所がどんなに良くないかを感じさせ、「帰りたくない」とも思わせるほどでした。しかし国が違えば自然環境と人が作った文化は異なります。特殊な民族性や文化背景を形成し、両国間で評価や比較するのはとても難しいことです。私は台湾人ですから、私たちの場所の長所は知っています。「台湾の全てが日本に劣っている」という考えは生まれません。台湾は私が二十二年育った国ですから！この八日間で、私は「想像の日本」と「実際の日本」を見ただけで、優劣などはどうでもいいのです。

東京はアジアで最も繁栄している都市です。そして常に変化している都市です。「変化」とは中性的な言葉です。進歩や斬新さを表していますが、変化によって伝統とその精神が失われるのではないかという心配も存在します。日本の人口構成は台湾と似ています。少子高齢化、地方人口の流出、より良い生活を求めて、若者は都市へと行き、色んな要素で自分を失って行くのです。私は長野を訪れ、年長者が甚句や茶道、和服等全てを保護し、それを熱く紹介してくれたのを見てとても感動しました。新宿の町並みでフラフラし笑っている若者は一体何に関心があるのか知りたくなってしまいました。実家の美しさに心動かされないのでしょくか？台湾でも世代によって差があります。都市と地方の差も存在します。若者は伝

統的習慣や純朴な田舎での生活に興味を示しません。しかし、台湾に戻ってからは現地の文化に触れる機会をより多く作り、一生懸命それらを守って行こうと思いました。文化について子供や孫に伝え、遠方から来たお客にも知ってもらいたいと思います。なぜなら、それこそが私たちの「根底」だからです。

日本人は時折とても偽善的だと聞きました。どのように対応すれば相手が喜ぶかを知っており、親切は本当の親切ではないかもしれず、ただの「仕事」である、と。もしかしたら旅行だったからかもしれないませんが、私は種々の好意を受け、親切にされ、とても心地よかったです。日本のサービス品質について言及すると、ただ「至れり尽くせり」という言葉でしか表せません。ガイドの説明や商店の店員の対応、バスガイドが淹れてくれた温かいお茶、ホテルでの揃ったアメニティ、いつ敷かれたかわからない布団、料理人のメニュー解説、いつでも清潔に保つための便座など、全てです。これは日本人の職を忠実に全うし、怠ること無い仕事の態度を表しており、常に「周りに助けられている」と感じていました。本当に感謝しています。

3. 心からの感謝——帰国後きつと日本語をマスターします！

今回の訪問は多くの人々の助けを借りました。団長は常に私たちに異なる視野を与えてくれました。Sさんの通訳（もし通訳が無ければ、日本語が得意でない私はとても苦勞したでしょう）、KさんとHさんの温かな付き添い、そして十四名の団員たち、私たちはお互いに助け合い、東京での大冒険、豊の上で遊んだ大富豪、雪の上での転倒、短い八日間はまるで長く見知ったかのようでした。

他に、芋井小学校で出会ったおじいさん、おばあさんたち。彼らに会えて本当に嬉しかったで



す。餅を搗き、雪をかき、伝統の歌に合わせて踊りを踊り、多くの記憶から皆さんの愛を感じることが出来ます。A家では「一宿一飯の恩」を受けました。お父さんもお母さんもとても良くしてくれて、全てが私の心に感動を呼び起こさせました。例え言語の隔たりがあっても、字典をめくりつつおしゃべりし、多くのことを学びました。あなた方が贈ってくれたお守りやハンカチは私がいつも身に付ける宝物となっています。

翌日、バスに乗って長野と別れる時には涙が無意識に流れてきました。一幕一幕の情景、一分一秒の思いが私の心の中に湧いてきました。当時私の頭には「私はみんながくれた笑顔をもって帰国します。そしてその人情と温かさを台湾の家族や友人に分け与えます！」という思いが浮かんでいました。

帰国後、私は日本語をマスターすると心に決めました。なぜなら、言語はただ大学の単位を取るためのものではなく、異国で自信と勇気を得るものであり、それはどんな荷物にも勝ります。将来流暢な日本語で私は感謝の気持ちを伝えたいです。

4. 結語

作家の海明威が『流動的饗宴』という本の中で「パリを離れるなら、今後私はパリを描けるかもしれない」と言っています。私は今東京・長野を離れ、両手いっぱいプレゼントと戦利品以外に、

重い荷物の中にはたくさんの物語が詰まっています。本来人と人との間には一種の絆があり、それは言葉で言い表すことなどできないのです。目の奥、心、写真、記憶、それらの中にあるのは純朴と誠意なのです。多くの感覚と思いが目の前にちらついています。八日間の記憶は時間とともに色褪せることはありません。この報告書を完成させることで、より強く「短期滞在」で得た感動を留めておこうと思います。

私が見たことが無い日本

国立台湾大学工業商業管理学科

彭晟展

まず、交流協会が今回の日本研究支援ウィンターキャンプに参加する機会を与えてくれたことに感謝します。以前に何度も日本へは行ったことがありましたが、今回の訪日旅行は今まで体験したことがない多くの経験をしました。一部の行程は個人旅行でも団体旅行でも手配できないものでした。ですから台湾に戻ると、本当に今回参加できて良かったと感じました。そしてこれは永遠に保存しておくべき思い出です。以前少なからず日本へ来たことはありましたが、今回は以前に体験したことがない部分を選んで、重点的に記載しようと思います。

ウィンターキャンプの報告書は当然政治大学国際関係センターで行われた二日間の授業から始めなければなりません。私自身は日本語学科ではないので、その方面の授業を受けることは比較的少ないため、この二日間の授業では多くのことを学びました。最初に李世暉教授による日本外交の授業は私たちにも分かりやすく、1863年の下関戦争から話が始まり、近年の日本政党の交代による外交問題まで、短い時間で日本の150年間の外交の発展に関して大凡の理解が出来ました。その中で

彼は日本の自民党と民主党の外交政策に於ける姿勢を分析しました。それは私にとって特別な助けと成りました。なぜなら個人的に政治に関してとても興味があったのですが、以前は日本の政党に関してほとんど理解していなかったからです。李世暉教授の分析で私は短時間に現代日本における二大政党の理念と方向性を理解でき、私自身がどちらの政党に偏っているのかを気づくことができました。これを基礎に、今後日本の政治研究をすれば、とても順調に進められると思います。日本の外交以外に、李世暉教授は多くの興味深いことを教えてくれました。例えば彼の研究領域は日本のデジタル産業であり、「世界を変えた任天堂」という本も書かれています。私はこの方面にとっても興味があり、彼の講義を聞き終わると、私はもっと討論をしたくなりました。本当に面白かったです。他に、日本での学業生活の経験を語ってくれました。今年三月末に名古屋大学へ交換留学する私にとってとても大きな助けとなりました。

昼休みには蔡先生が私たちに新しく設立された現代日本研究センターについて紹介してくれました。聞く限りとても良さそうで魅力的でした。しかし私はやはり交流協会の奨学金を得て日本の大学院に進学することを目標にしたいと思います。T教授の日本の政治と社会文化の講義は日本のお札に描かれている人物を中心に、近代日本の発展と変化について分析されました。その後の日本の政治体制の紹介も私に日本政治に対する一歩進んだ理解を与えてくれました。彼は今回の訪日団の団長ですので、私は休み時間に話をし、お互いに知りあっておきました。会話の中で先生はとてもユーモアがあり付き合いやすい人だと分かり、訪日研修に対して少し気持ちがほぐれましたし、更に多くの期待が持てました。三人目の林賢参教授は日米安保体制を全体的に紹介してくれました。しかし私が驚かされたのは、彼は少し遅めに

日本へ留学したことです。以前は調査局にいたそうので、私の見識を広げてくれました。

日本での日程に関してですが、初日の夕食は居酒屋へ行きました。居酒屋は私自身訪れたことがありませんでした。これまで考えていた居酒屋はカウンターがある小さな場所だと思っていましたが、個室があり、メインの食材が野菜だという居酒屋があるなんて思いもしませんでした。随行してくれた通訳のSさんによると、ターゲットは女性で、所謂「女子会」が行われる場所だそうです。これを聞いて、多くの野菜があるのにも納得がいきました。しかし私のような肉好きの人にとっては少し食べ慣れませんでしたし、満腹にもなりませんでした。それ以前に李世暉教授から日本の飲食文化は性別の差が大きいと聞いていました。私が大好きな松屋などの牛丼店には一般的に女性一人では訪れないそうです。今回身を以てその授業の内容がわかりました。男性が訪れ「男子会」が開かれる店もあるのでしょうか。

翌日訪れた深川江戸資料館はとても視野が広がってくれました。江戸時代をこんなにも完璧に再現しているなんて、まるで江戸時代にいるかのように感じました。ガイドの説明を聞いて、すぐに江戸時代の一般庶民の身を切る生活が理解できました。再度伝統文物に対する重視と保存に費やす心配りを感じることができました。これは日本人の意識の根底を反映しており、日本国内で自分の国に対する認識を強める上で大きな役割を担っています。同じような理念を私たちは日本の国立図書館である国会図書館で感じる事ができました。図書館の職員は日本でこれまでに出版された全ての出版物の保存し、積極的にデジタル化を進めています。日本の国家意識が本当に強いことがここからも見て取れました。台湾はこの点に関しては少し欠落しており、国家の位置すらも定まっておらず、国家意識の育成など言うまでもありません。同時に、ここは一般的な訪問では見られない場所

でした。なぜなら普通の利用者では書庫に入ることとはできないからです。ですから今回この行程に参加できたことはとても幸運でした。

長野県は以前に何度か訪れたことがありました。しかし長野市には行ったことはありません。個人的に長野の田舎の風景がとても好きで、今回の長野訪問も同様にとっても期待していました。長野に到着した初日は善光寺の宿坊で一晩を過ごしました。これは一般的な旅行では経験し難い場所です。また彼らの精進料理を食べました。台湾のものとは異なり、とても精緻なものでした。しかし個人的には冷たい料理を食べる習慣がありません。早稲田大学の討論会で出た昼食の弁当も冷たく、なぜ日本人が冷たくなった弁当が好きなのか理解できません。台湾では暖めて殺菌しますが、日本では冷蔵して殺菌する習慣があると聞いたことがあります。もしこれが理由ならば、やはり加熱殺菌した方が効果はあるように感じます。和服、茶道はこれまで体験したことがありませんでした。和服を着るとまるで坂本龍馬に変身したかのような感覚になりました。男性の和服に比べて、女性の和服は着るのに手間がかかります。再度日本女性の苦勞を感じることができました。台湾と比べると男性は外、女性は内という伝統的な考え方が日本では比較的根強いような気がします。

訪日団の日程で一番期待していたのはやはりスキー、温泉、ホームステイの三カ所です。長野の二日目の夜に泊まった松代荘はとても伝統的な温泉旅館でした。バスは旅館の入り口に止められ、中から職員が国旗を持って出てきて、私たちを出迎えてくれたのです。とても嬉しく、また驚きました。松代荘の部屋に入るととても興奮してしまいました。これがずっと思い描いていた温泉旅館の伝統的な部屋なのですね。椅子とテーブルが置いてあるスペースではお茶を飲んだり、おしゃべりしたり、窓の外の庭を眺めたりできます。夕食

は長机に所狭しと料理が並べられていました。以前日本を旅行したときには予算が無く、このような旅館に泊まることはできなかったのも感動しました。松代荘の松代温泉は鉱物泉で露天風呂もありました。私はこの得難いチャンスを逃すまいと、その日の晩と翌日の朝に入りに行きました。朝に雪が降る中露天風呂に入る感覚は気持ちよく、「これぞ日本の温泉」という感覚になりました。しかし、日本人は温泉に入る時、服を全て脱いで入ります。郷に入れば郷に従え、そうするしかありません。最初は少し恥ずかしかったのですが、何度も入るうちに少し慣れてきました。以前に初めて金沢で温泉では入った時、服を身につけていたので隣のおじいさんに怒られてしまったのを良く覚えています。本当に恥ずかしい経験です。日本人と付き合う時には多くの工夫を必要とします。温泉に入る時には裸の付き合い、というやつなのだと思います。

象山地下壕の見学は私にとって特別な行程の一つでした。一般の旅行客はほとんど興味を持ちません。私自身は大日本帝国時代の日本に興味があったので、今回その当時に計画されていた松代大本営と呼ばれる象山地下壕を訪れることができ、日本が敗戦前にこのような計画をしていたのだと知ることができました。ですから、大きな興味が沸き、熱心に現地高校生の解説を聞きました。彼らの解説から戦争の残酷さを知ることができました。この壕を掘る際にどれだけの人が犠牲になったのかわかりません。私が特に印象に残った言葉はこの地下壕を七割掘り進めたところで日本は投降し、工事は終了しました。その中で高校生の一人が、もし戦争が終わらず、地下壕が完成していれば、アメリカ軍は第三の原爆を松代に落とした可能性があり、彼は一言「考えるだけでも恐ろしい」と漏らしました。これは彼の本心から出た言葉であると感じました。再度戦争の醜さを強調されただけでなく、高校生が真面目に自分の国

の歴史を直視し、考えていることにとても感心しました。同様の第二次世界大戦の話題は早稲田大学の討論でも出ました。T教授が日本人の前で南京大虐殺について話すべきではない、これはとても敏感な話題なのだから、とおっしゃいました。加えて、これまでの日本人観察によって、彼らはあまり第二次世界大戦のことについて言及しないことに気づきました。ですから、あの高校生が積極的に理解し、第二次世界大戦のことを考察しようとするのはとても素晴らしいことなのです。

人生で初めてのスキー体験は準備段階からとても新鮮でした。スキー板を履くと歩くことすら困難になりました。スキーをしたことがある人が言っていたように、スキーウェアは本当に暖かく、滑っていると汗をかくほどでした。リフトに乗り斜面を登っている時はとても気持ちよく、風景もとても綺麗でした。滑り降りてくる時にはスピード感がありました。初心者は転ぶことでしか停まることは出来ません。重心のかけ方や曲がり方のコツを掴んだ時にはもう終了時間になってしまい、とても名残惜しく感じました。台湾では体験することができないこのスポーツを初めて体験し、とても好印象で、機会があれば是非また滑ってみたいです。

最後に、今回最も印象深かったのはホームステイにおいて他にありません。直接日本の田舎の伝統的な家に一晚住むことは身を以て日本の生活を理解できる最良の方法の一つです。最初は「田舎に泊まろう」というテレビ番組のような気持ちでした。これは私がとても好きで、とても懂れている番組です。行ったことが無い田舎に行き、会ったことのない人の家で一晚を過ごすというものです。結果、とても愉快におしゃべりをし、翌日にはまるで長年付き合っている旧友のようになっていくのです。人と人との絆が見られ、人の心の温かさを感じられます。旅行好きな私にとって言葉にならない魅力があります。まさか今回のホーム

ステイでは私の予想を大きく上回るなんて思いもしていませんでした。

N家は七人の大家族です。家の門をくぐると歓迎のポスターが貼られ、最初からとても温かさを感じました。家に上がると私たちは多くのことを話しました。Nさんは旅行会社で働いていて、以前のチケットや写真を持ってきて、私たちにを見せてくれました。目移りして見きれないほどでした。仕事の関係で彼は何度も台湾を訪れたことがあり、多くのことを話すことができました。彼らは日台関係はずっと良好な状態を保つだろうと認識していますし、またある台湾に感謝する事例を私たちに語ってくれました。第二次世界大戦後、本来アメリカとソ連が長野県を分割統治する予定でしたが、蒋介石の猛反対により長野は分裂せずにすんだのです。また除雪機を初めて操作しました。これはとても得難い経験です。N家はこの地方ではとても有名なようで、彼らの家の御神木は地図の上にも載るほどです。Nさんは私たちを連れて戸隠神社へと向かいました。その途中で、部分的ではあるけれど道路の地下に暖房設備があり、雪が積もらないと聞きました。日本政府はこんな場所にもお金を使っているのだと知ってとても驚きました。本当に国民のことを考えていて、福祉も充実しており、さすが先進国家だと感じました。しかし恐らくこういう状況によって、日本政府は財政の収支にバランスが取れていないのかもしれない。日本政府の国民に対する措置を見ると、私は税金を納めるのも納得できるように感じました。N家の夕食はとても豪華で、私にとってみれば今回の日程で一番楽しい食事でした。彼らは本当に私たちを家族のように扱ってくれ、みんなでこたつを囲みながら食事をし、話をしました。食べていたのは鶏の唐揚げ、肉じゃがなど日本の伝統的な家庭料理です。私はまるで台湾から遠く離れた場所で自分の別の家を見つけたかのような感じでした。Nさんには小学校六年生にな



る男の子がおり、その学年は彼一人だそうで、芋井中学校も間もなく閉校するそうです。Nさんは特別にニュース記事を私たちにを見せてくれました。私は日本の少子化と地方の人口流出の厳しい問題について身を以て感じました。Nさんは私たちによく勉強し、今後人生で成功を納め、高みを目指すよう励ましてくれました。時間のある時には長野に戻ってきて私たちに会いにきてくれ、ともおっしゃっていました。この言葉を聞いて、私たちの間にはまるで家族のような情のある関係が築かれているのだと感じました。自分の故郷から遠く離れた場所で肉親の情に出会えるなんて、まさにホームステイの魔力です。

私たち三人の男子学生は今後も連絡を保てることを願って、連絡先を残しました。その結果、数日前に私はN家からの手紙を受け取りました。手紙の内容は特別に感動するものではありません

でしたが、あの日のことを思い出し、私は無意識のうちに涙を流していました。もし「田舎に泊まろう」の番組が一晩で赤の他人から友人へと変化するのであれば、今回の私たちは、一晩で赤の他人から家族へと変わったのです。もちろん後者の絆の方がより尊いものです。私は日本へ留学したらきっと長野を訪れ、Nさんたちに会いに行こうと決めました。

日本留学の前にこの活動に参加できたことで、日本の理解を深め、多くの見たことが無い体験ができました。留学しても経験するチャンスがあるとは限らない体験であり、私の人生に於いて重要な宝物となりました。

上は今回の活動で私が最も感動したスキーとホームステイの写真です。

2012年「日本研究支援」ウィンターキャンプ報告書

台湾大学国際企業学部三年
潘敏政

一体どれほどになれば「本当の理解」になるのでしょうか。たとえ一年近くの時間をかけて全体的な理解していても、実際それに触れていなければ、それは知らないのと同義なのではないでしょうか。全能な脳が複雑な人間を作り上げます。その複雑な個体が集まり一緒に生活することこそが、まさに前述したような空間を作り上げられるのではないのでしょうか。簡単に言うと、人一人を理解するのでもとても簡単ではありません。一つの地域の文化を理解するにはパソコンの前で適度にクリックしマウスを動かし、資料を集めてできるような簡単なことではない、ということです。

彼らと一緒に生活することが一番なのです！

今回光栄にも「日本研究支援」ウィンターキャンプの活動に参加することができました。一緒に

参加した団員たちも同じような感情を持っていると思います。私たち 15 名の台湾大学生は疑問の余地もなく人や文化、言語等日本の全てが好きです。台湾では日本という言葉は良く知られています。街には日系の三越百貨店があり、今週 MTV で上位に入っているサザンオールスターズの曲を聞いて、明日の服装をどのようにすれば日本の流行雑誌のようになるかを考えています。しかし、これが所謂「日本」なのでしょうか？私はいつもこの問いを自分に投げかけます。答えは明らかに NO です。ですから、私は一度日本に行って日本文化を体験してみたくなり、実際に一度日本へ個人で旅行に行きました。台湾作家が書いた旅行本を頼りに行ってみると、そこは全て観光客で埋め尽くされていました。台湾の観光客を迎えるため、この本に載っている有名な観光地は台湾観光客がよく行く場所でした。ですから日本に対する理解も偏りが免れません。多くの部分は台湾観光客が知らない部分であり、この部分こそがより日本の文化に近い部分なのではないのでしょうか？

つまりウィンターキャンプの最良の点は、一般の台湾人が知らない日本人と日本文化を明るみに出し、私たちをその文化の核心へと誘うことにあります。以下には私が旅行中に感じた素晴らしい部分を記載します。

日本の初日の夜に強烈なカルチャーショックを受けたことは今でも思い出します。KさんとSさんが本当の居酒屋文化体験に連れて行ってくれたのです。私たちは型通りの印象が偏見を与えてしまうことによりやく気づきました。日本の居酒屋はとても良好な社交場所であり、衛生環境も悪くなく、全ての日本人が居酒屋で酔いつぶれているわけではないのです。特に女性のために設計された居酒屋だとなおさらです。

国会図書館は私が最も期待していなかった訪問先です。しかしそこで学んだ知識と精神は多くの台湾人が反省すべきことでした。台湾ではよく、

誤った政策は贈賄よりも怖い、と耳にします。日本人はどんなことでも長期的な計画を立てます。建築に関しても例外ではなく、長期的視野を含んでいます。まず、国会図書館内の書籍は持ち出すことはできず、ただ館内で閲覧できるのみです。なぜなら同じ本は多くても 2 冊しかないからです。そして本を貸出し返却システムは全て自動化されており、書籍の損壊の程度を大幅に減らすことが出来ます。ここからもこの民族は知識の尊さを重視しており、その知識をできるだけ保護し、後世へと受け継ごうとしていることがわかります。日本の戦後の強大な発展にはちゃんと理由があったのです。その他、日本は地震が頻発します。ですから国会図書館の新館の書庫は地下に作られています。東日本大地震の時にはほとんど影響がなかったことがそれを証明しています。旧館の地上にある書庫は 3 ヶ月を費やしてようやく元通りにしたそうです。当初日本人は地下に書庫を造る際、浸水時の解決方法を考慮していませんでした。なぜなら日本政府は国民に対して東京で浸水することはないと保証していたからです。台湾政府は国民に対してインフラ設備方面で更に努力が必要だと考えます。また配慮が周到な日本人は長時間地下で仕事をする精神的負担を考慮し、設計の上で地下 8 階の環境がまるで地上 1 階かのような感覚になるようにしています。これは人の基本的需要の尊重です。人の存在価値は同じです。日本人の職場環境の重視は台湾のコストダウンの企業経営よりも価値があるものだと感じました！

早稲田大学で日台関係を学び、日本の大学生と交流したことはとても収穫が多いものでした。国際的な外交交渉に於いて、言行に注意することは外交官にとって必須のルールであり、「失言」の結果、国際紛争が始まる可能性もあります。この交流会の主要な参加者は大学生ですが、個人の言動には責任を負う必要があります。国際的に多くのタブーの話題があり、公の場で討論することは許

されません。しかし国際交流に慣れていない私たちの発言は少し奔放過ぎていて、私たちの団長である T 先生は、台湾の学生は他人の立場に立って考える心が欠けている、とおっしゃいました。歴史的事件の解釈は一つに絞ることは難しく、その事件の定論が定まっていない段階では一方に挫折と誤解を与えてしまいます。国際企業学部に属している私は国際的な人材になる前に、小さな島の井の中の蛙であり、狭い考えに捕われるのではなく、自分を国際化し、マクロな視点を身に付けなければなりません。また早稲田大学で教鞭をとっている K₂先生を尊敬します。彼は気まずい雰囲気会議に入ってきて、それをとても有意義な歴史の授業に変えてしまったのです。更に出席していた人々に第二次世界大戦に関して新たな観点を与えてくれました

この8日間で最も親切で温かい行程は長野市芋井地区でのホームステイ体験でした。日本人口の老齢化はひどく、若者は都市に集中していますので、東京ではどこを見ても流行を追う若者だらけでしたが、田舎の活力は急速に低下しているのです。しかし芋井の人たちはそのような命運に屈してはいませんでした。彼らは伝統文化の保護にその力を使っているのです。美しい観光パンフレットを作っているだけでなく、芋井地区の伝統的な踊や食品を保護し、積極的にホームステイ活動を行っているのです。日本人は人付き合いにおいて、仲の良い人以外、他人を家に呼ぶことは少ないそうで、今回はとても貴重な経験でした。これは何の隔たりもなく、日本人の日常生活を理解できる絶好のチャンスです。N 夫婦のもてなしには今でもとても感謝しています。これは私が初めて経験した現地の生活でした。初めて除雪機を使用し、初めてこたつが世界で偉大な発明だと知りました。たった2日間しか一緒に過ごせませんでした。青春の中に消えること無い刻印が捺されました。

唯一残念だったのは風邪を引いてしまい、和服と

茶道が体験できなかったことです。この2つは私が最も期待していた体験でした。しかし良い方に考えれば、私はタクシーと医療行為を体験することができたのです。日本のタクシー料金と医療費はとても高額で、本当に必要な時以外は台湾旅行客はきっと体験できないでしょう。そして高雄事務所の H さんと東京本部の K さんの付き添いとその処理にとっても感謝します。そうでなければもっとひどい合併症を発症していたかもしれません。長野中央病院は長野県でも一二を争うほど大きな病院で、院内には台湾には無い優しいサービスがありました。長い待ち時間の間に、看護師がその時間を利用して病人の病状や病歴などの情報を尋ね、ファイルを作



松代の雪景。松代荘にて。



ホームステイの N さん夫婦との記念写真 N 家御神木前。

り、医者に渡します。それにより診察時に問診時間が短くて済み、患者の待ち時間を短くでき、院内感染の危険を減らすことが出来るのです。

「本当の理解」とはまだまだ遠いですが、今回の「日本研究支援」ウィンターキャンプに参加したことで、私は大きく一歩前に進むことができたと確信しています。今回の活動を通して、もともと日本が好きだった私ですが、より好きになりました。交流協会が台湾大学生にこのような得難いチャンスを与えてくれたことに感謝し、将来多くの台湾大学生がこの活動に参加すると同時に、日本の大学生が台湾を訪れ、違った旅や研修を体験することを希望しています。



芋井伝統文化。芋井第一分校にて。